

<実践報告>

「教育参加」における学生の体験内容の分析
— 国立信州高遠少年自然の家での活動レポートから —

那須良寛 信州大学大学院教育学研究科学校教育専攻
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座
谷塚光典 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Students' Experiences Through "Teaching Participation"
— A Case Study of Shinshu Takato National Children's Center —

NASU Yoshihiro: Major in School Education, Graduate School of Education,
Shinshu University

DOI Susumu: Educational Sciences, Faculty of Education, Shinshu University

YATSUKA Mitsunori: Center for Educational Research and Training,
Faculty of Education, Shinshu University

Students' reports of "Teaching Participation" at Shinshu Takato National Children's Center are analyzed from six points of view; (1) awareness of importance of experience, (2) understanding of others and oneself, (3) understanding of children, (4) behaviors and insights as teacher and instructor, (5) reflection on programs and activities, and (6) understanding of children who have any disabilities.

【キーワード】 臨床経験科目 体験的カリキュラム 体験 経験

1. はじめに

信州大学教育学部では、平成8年度より1年次生の必修科目として臨床経験科目「教育参加("Teaching Participation")」を開設してきており(小林・土井, 1997), 開設以来, 附属教育実践総合センター(平成8~10年度は附属教育実践研究指導センター)が担当してきている。学生は, 学部の教育理念「臨床の知」に基づき, 「教育参加」(1年次), 「学校教育臨床演習」(2年次), 「基礎教育実習」(3年次), 「応用教育実習」(4年次)という臨床経験科目を履修することになっている。

谷塚・東原・土井(2001)の中で述べられているように, 「教育参加」における学生の体験内容は, 自然体験・野外活動や生活体験, 生活創造などに分類できる。本研究では, 平成13年度「教育参加」で設定された207の活動の中から, 独立行政法人国立少年自然の家国立信州高遠少年自然の家(以下「高遠少自」)における活動に焦点をあてて, これら

の活動に参加した学生たちは、子どもたちとの活動を通してどのようなことを体験し、何を学んだのかを明らかにする。

2. 教員養成における「体験的カリキュラム」の意義

近年の教員養成カリキュラムでは、教師を志す学生の教員としての実践的指導力の育成に資するために、体験的カリキュラムが大きく導入されてきている。自然体験や社会体験は、子どもの「生きる力」を育むことにおいてのみならず、青少年にとっても重要であることが、中央教育審議会などの答申において述べられている。

平成9年度より行われている「教員養成学部フレンドシップ事業」では、「学生が子どもたちと触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身に付けられるよう、宿泊触れ合い活動や理科実験教室などの機会を設ける」（文部省、1997）ために、教育委員会等と連携・協力して企画運営協議会を設置した上で、授業科目を開設してきている。

このフレンドシップ事業は、各大学により様々な名称のもとに実施されている。例えば、「信大 YOU 遊サタデー」「信大 YOU 遊広場」（信州大学）、「学びのひろば」（上越教育大学）、「自然体験学校」（福島大学）、「わくわくサタデー」（横浜国立大学）、「ふれあいアクティビティー」（鳴門教育大学）、「Make Friends」（熊本大学）、などがあり、各大学から発行されている報告書の中で活動の成果が詳しく述べられている。（濁川、2001）

『「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」中間報告』では、青少年にとっての体験活動の必要性及び意義について、「様々な体験活動を通じて、他人に共感すること、自分が大切な存在であること、社会の一員であることを実感し、思いやりの心や規範意識をはぐくむことができる」としており、学校内外を通じて質量共に充実した体験活動の機会を拡充していく必要を述べている。あわせて、学生の自主的なボランティア活動の単位認定等を積極的に進めることを奨励している。

3. 平成13年度「教育参加」の概要

「教育参加」は、教育に関心を抱いて教育学部に入学した1年次生が、信州大学教育学部附属学校園や県内外の少年自然の家・青年の家、県内の養護学校における教育活動や行事に参加したり授業を参観したりすることを通して、子ども理解、教師理解、学校理解を深め、教職への関心・意欲を高めることを目的としている。1年次生が、学校や社会教育施設で行われる教育活動の実際場面に参加したり、教育実習の様子を参観したりすることによって子どもたちや教職員と触れ合うことは、教職への認識を深める機会となり、教育学部で4年間にわたって学んでいく基礎となる。

16の機関における活動は、全207に及ぶ。青年の家や少年自然の家の社会教育施設（以下、社会教育施設）9機関における活動は、長野県教育委員会文化財・生涯学習課の分類にしたがって、自然体験・野外活動、生活体験、生活創造、歴史体験、国際体験、スポー

表1 信州高遠少年自然の家における「教育参加」の活動（平成13年度）

メニューコード	活動名	内容	開始日	曜日	開始時刻	最終日	曜日	終了時刻	備考（参加条件等）
D01-1	都会っ子あつまれ！ー農作業体験をしようー（前期）	・事業の活動補助として、用具の準備や資料準備を行う。 ・農業体験などに参加しながら活動の補助をする。（活動例；田植え等の作業体験、農家との交流活動など）	5月12日	土	11:00	5月13日	日	13:00	・準備のため前泊あり ・農作業ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D01-2	都会っ子あつまれ！ー農作業体験をしようー（後期）	・事業の活動補助として用具の準備や資料準備を行う。 ・農業体験などに参加しながら活動の補助をする。（活動例ー稲刈り等の作業体験、交流活動など）	9月22日	金	11:00	9月24日	日	13:00	・準備のため前泊あり ・農作業ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D02-1	みんな友だちー土と人ーPart1	・事業の活動補助として用具の準備や資料準備を行う。 ・心身に障害のある方を含む親子や家族とともに野菜作りなどに参加する。（活動例；野菜作り・草取り・調理活動・交流活動など）	6月9日	土	11:00	6月10日	日	13:00	・2回通して参加できる学生が望ましい。 ・準備のため前泊あり ・農作業ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D02-2	みんな友だちー土と人ーPart2	・事業の活動補助として用具の準備や資料準備を行う。 ・心身に障害のある方を含む親子や家族とともに野菜作りなどに参加する。（活動例；野菜作り・草取り・調理活動・交流活動など）	11月10日	土	11:00	11月11日	日	13:00	・2回通して参加できる学生が望ましい。 ・準備のため前泊あり ・農作業ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D03-1	自然の中で環境スクールー総合的な学習の時間実践事業ー（前期）	・事業の活動補助として、用具の準備や資料準備等を行う。 ・参加（小・中学生）の生活面や実践活動の補助を行いながら総合的な学習の時間の支援をする。	6月16日	土	10:00	6月18日	月	14:00	・準備のため前泊あり ・野外活動ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D03-2	自然の中で環境スクールー総合的な学習の時間実践事業ー（後期）	・事業の活動補助として、用具の準備や資料準備等を行う。 ・参加（小・中学生）の生活面や実践活動の補助を行いながら総合的な学習の時間の支援をする。	9月27日	金	10:00	9月29日	日	14:00	・準備のため前泊あり ・野外活動ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D04	「中仙道・甲州街道」歩け歩け旅ー仲間とつくる6泊7日ー	・歩き旅への参加者（小・中学生）のリーダー、カウンセラーとして活動する。（活動例ー野外炊飯やキャンプ生活全般のリードや歩き旅への引率、補助等）	8月1日	水	11:00	8月7日	火	13:00	・準備のため前泊あり ・野外活動ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D05	子ども自然学習隊ー中央構造線ー諏訪湖へ天竜川を行くー	・事業の活動補助として、用具の準備や資料準備等を行う。 ・参加者（小・中学生）の生活面や実践活動の補助を行うとともに自然観察等に参加する。	11月23日	金	11:00	11月25日	日	13:00	・準備のため前泊あり ・野外活動ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可
D06	氷点下の世界ー信州たかとおウィンターキャンプー	・事業の活動補助として、用具の準備や資料準備等を行う。 ・参加者のとともにウィンターキャンプに参加するとともに活動中の安全面や生活面のサポートをする。	2月9日	土	11:00	2月11日	月	13:00	・準備のため前泊あり ・冬の野外活動ができる服装 ・最寄りのJR駅まで送迎可

ツふれあい、科学、ボランティア、の8つと、筆者が追加した、指導者講習・研修、指導者講習・研修補助、の2つを合わせて10に分類できる。

高遠少自では、「教育参加」として表1に示した9つの活動が提供されており、のべ27名の学生が参加した。これら9つの活動は、自然体験・野外活動(D003-1, D03-2, D05, D06)、生活体験(D01-1, D01-2, D02-1, D02-2)、歴史体験(D04)に分類される。

4. 学生は何を体験したのかー活動レポートからの考察ー

信州大学教育学部1年次生は、教育学部に入学したとはいうものの、1年次での授業履修は共通教育センターにおいて開設された科目がほとんどであり、「教育」や「教育学」に深く関連する授業や、それに準ずる活動に関わる機会が少ない。

個々の学生により体験活動の時期や内容が違ってくるが、全員が共通して受講することになっている授業が、この「教育参加」である。この授業は松本キャンパスから近い附属松本学校園や養護学校、少年自然の家などの社会教育施設において行われている活動に参加することを通して、自分なりの学びをしていくことがねらいであると捉えている。自分から受け入れ先とプログラムを選択して意欲的に取り組んでいく授業としては、人気が高いと思われる。

この中でも、高遠少自のプログラム・事業に的を絞り、そこに参加した学生が何を学んだのか、何を得たのかを活動後のレポートをもとに分析した。高遠少自は、著者自身も「教育参加」でお世話になり、以後は学生ボランティアとして様々な主催事業に参加している所縁の深い場である。ここでの活動を通しての共通の理解が得られる点が多く見られた。

十数名の学生がここでのプログラムに参加した結果、各自で活動の成果についての考察を行っている。その中でも、特に印象に残ったものを取り上げ、幾つかの観点に絞り込んだ。内容が重複しているように感じるものもあるが、それぞれの着眼点を中心にまとめているので了承いただきたい。

- A 経験することが重要である。
- B 自己・他者を理解する。
- C 「子ども」像の理解。
- D どのように行動するべきか、考えるべきかを知る。
- E 事後の考察。自己や他者、受け入れ先に対しての指摘。
- F 障害について。

4.1 A 経験することが重要である

①今回のような機会をできるだけ活用させてもらい、多くの経験を積んで、感性豊かな教師になれるようにがんばりたい。また、課外活動だけではなく、専門知識もしっかり学び、知識も溢れる教師になれるように努力する必要があると思う。

自然の中で環境スクール 理数科学教育 男子

②地元の方が講師として参加されたとき、その方々の行動から学ぶことはもちろん、その他活動が終わった後の自由時間などにも話を聞く機会があり、色々な話を聞いたり、自分の考えを伝えることができ、また、質問に対する答えや、自分の考えに対する意見も聞かせてもらいました。
自然の中で環境スクール 理数科学教育 男子

③この活動に参加したことによって、自分はもっとたくさん、今回の様な子どもと触れ合う機会を持つべきだと実感した。教育について机上で物事を学んでも、その知識なり技術なりを養う機会が無いと真に学んだことにはならない。現に今回の活動では、今まで学んだ「知識」のことなど考える暇もなかった。「経験」は大事だ。

子ども自然学習隊 言語教育 女子

各々の活動内容は違えども、経験する過程を通して、様々なことを感じとっている。この「経験」することは、以下の内容全てに通じる出発点であるが、初めての事を経験したり、以前とは全く違うこと、似ているけれど自分の受け取り方が全く違うことを経験したりすることで、様々なことへの理解や発見が深まってくると感じている。まさに経験主義の最たるものとして捉えても過言ではないが、知らない事や経験のない事は、とにかくやってみなければ分からないという事である。②は活動を通して、指導者から学ぶことを発端にして、自己の考えを深める経験をしている。また①と③では、活動の結果、経験が重要であるが、それを100%生かすには、知識との融合が必要であると考えている。どちらかが先行したとしても、いずれはお互いが繋がる必然にあるキーワードであると考えている。「教育参加」という授業科目のとらえ方は、必修の授業単位としてのみとらえるか、または、教師を目指す学生自身の糧になるものとして認識するかは、学生により異なっていると思われるが、いろいろなことを「経験した」「学んだ」ということはまぎれもない事実である。

4.2 B 自己・他者を理解する

①参加者にはいろいろな人がいて、時にはその対応に戸惑うこともあったけれど、私のもっている感覚で周りの人のことも考えてしまっただけなのを改めて思い知らされました。
農作業体験 言語教育 女子

②子どもたちとの接し方、そして人と人とのコミュニケーションのとり方を少しだが身に付けることができたような気がする。
氷点下の世界 生活科学教育 男子

③ボランティアの学生や他の教育参加の学生の中には、名前を覚えていて、手をつないで帰っている人もいました。今後はそのような深い関わりも必要だと思います。

氷点下の世界 理数科学教育 男子

大学キャンパスの中には、多くの同級生、先輩たちが学んでいて、生きている。そこは様々な個性のぶつかり合いの場となり、自分らしさを発見することができ、また他人との違いを明らかにすることもできる。その中で、自分の性格や他人について認識していく。そして、認め合うことが大切だと知ることもできる。

①は、障害のある子どもとその家族と関わる活動であるが、参加者の特性が一定しない場合、多様な感覚を研ぎ澄ます必要がある。それはまさに、30名以上の子どもたちとの関

わりをもつ学校現場で必要な柔軟性であったり、人生の中で自分の奥行きを深めるものであったりする。自分が考えたことが他人のとらえ方と全く逆であることは、往々にして起こることである。それを受け入れ、理解することで、新たな一歩が踏み出せるのである。

②は、他者理解の中で学んでいく方法論であるといえる。特に「氷点下の世界」は、親子参加の体験活動で、参加したスタッフたちは活動補助等の裏方の役割を担っていた。子どもたちと接点が少ないそのような状況下では、家族・親子で活動している中への自分からの積極的なアプローチが必要になってくる。その中で体験と理解が際立って作用しているといえる。

③は、端的に言えば、他者を見習い自分も心掛けていきたい、ということである。これは、他者の行動を知り、すばらしいものだと思えるからこそ考えることである。自己の価値を高くするための理解であるといえる。

その他の事例としては、自分が嫌な人間としての一面を持っていることに気づき、改善していこうと理解した学生もいる。自己の長所・短所に気づくことは本当に重要である。また、このような場でよく見受けられるのは、共に活動に参加している施設ボランティアに感化されることである。ある学生の中には、ボランティアに対して「自己犠牲を伴う人間」として献身的な姿を描いていたが、その気持ちと自己を成長させるための気持ちの融合により、積極的な活動に取り組んでいけるのがボランティアであると考えられるようになる。すなわち、ボランティアとその空間を分かち合うことで、「単位取得のための授業」という位置付けから、「自己成長のための意味のあるもの」ととらえるように変化していく。

4.3 C「子ども」像の理解

①本当にいろいろな子がいると知って勉強になった。どうしてこんな考えになってしまうのだろうか、どうしてこんな行動に出してしまうのだろうかという場面があり、これは今までの知識ではどうしても分からないことなので、本を読むなりして勉強していきたいと思った。

農作業体験 障害児教育 女子

②どの子も柔軟な気持ちを持っていると思うので、その気持ちを大切に、いろいろなことへの興味を引き出すきっかけをうまく与えられるようになりたいと思っています。

農作業体験 言語教育 女子

③一緒に活動することで、今の小・中学生が、(一部であるにしろ)どんなことに興味を持っているのか、どんな考えをもっているのかを知ることができた。このぐらいの年齢の子どもに抱いていた偏見を無くすことができたと思う。私はこの活動に参加する前までは、小学生に何一つとして自分を理解してもらえないのではないかとという多大な偏見を持っていたのである。しかし実際は全くそんなことはなく、時には私の方がはっとするような意見や言葉使いをすることがあった。

子ども自然学習隊 言語教育 女子

④この活動中に私が課題とした、小学生とどのように接すればよいのかということについては、よくできたと自分では思います。小学生と接する初めての機会でしたが、小学生の心がつかめたというか、信頼関係が築けて良かったです。

子ども自然学習隊 芸術教育 男子

他者を理解することに近いものであるが、子どもとの交流によって、子どもをどれほど理解できるか、受け容れられるかは、特に教員になるためには重要なことであろう。

①は、農作業体験のために多様な地方から集まってきた子どもとの交流による感想である。大人びた子、幼い子など 10 年近い年齢差の中で、すべてを理解することは困難であるが、これが理解のための第一歩となったようである。

②は、活動中に触れた子どものいろいろな気持ちを理解した上で、今後子どもの良いところをもっと引き出してあげたいと感じている。学校現場での子ども理解に近づいたものであるといえよう。

また、③と④は活動による交流を通じて、活動参加前から抱いていた子ども像を排除し、新たな理解が構築され、更に相互理解が深まっていく契機を得たといえる。

「教育参加」の特色の一つは、多くのプログラムで子どもとの触れ合いができるという点である。これをねらいとして、進んで子どもが参加してくるプログラムを選択する学生が多い。教育学部生の最大の山場でもある、「教育実習」の前段階として、できる限り多くの子どもと関わって理解を深めていきたいと、学生たちは望んでいる。

4.4 D どのように行動するべきか、考えるべきかを知る。

①私以外のボランティアや実習生の皆さんが全員年上で、それなりに経験を積んできている人たちだったので、まず自分の仕事を見つけるのに苦労した。自分がどう動いたらよいか分からなかった。しかし日を追うごとに全体を見渡して、今何が足りないか、何が必要なかを判断し、それを補う形で動けるようになった。本番をむかえてからも、子どもたちを一步引いたところから見ると重要な役割と、裏方である本部の仕事を両方経験でき、良い所も改善点も見え、非常に良い経験ができたと思う。 徒歩旅行 言語教育 女子

②子どもたちが出している微妙なサインや変化に気づけなかったこともあったので、今後は、子どもたちが望んでいることや悩んでいることなどにすばやく気づいてやり、それに対して自分ができることをよく考えた上で行動することが課題だと感じた。8月末にもキャンプがあるので、このような課題を意識して活動に臨みたいと思う。

徒歩旅行 言語教育 女子

③相手の子どもたちに、自分の行っていることの楽しさを伝えるためには、ただその手段、方法を伝えるのではないと考えました。自分がやってみて楽しかった、だからそれを伝えたい。そう考えれば、自分の楽しんでいる姿を見せられれば、その姿から伝えていることの楽しさを感じとってくれるのでは、と思いました。 環境スクール 理数科学教育 男子

ここでは「教育参加」の学生であるという位置付けから、自分が最低限求められている役割と、最大限期待されている役割について考えていることを知ることができる。

①と②は同じ学生の考えである。①では、これまで直に子どもと関わる活動に参加していたのだが、このプログラムでは、直に関わるスタッフの補助役を与えられた。直に関わるスタッフの意向に干渉しないように関わっていくための方法を見出すことに苦労していたようである。それに加え、他の経験の多いスタッフの中で自分はどのように活動していけばよいか課題であったようだ。自分なりに目標を持って臨むことで、いつもと違っ

た、子どもを一步引いた客観的な視点と、縁の下の力持ちである裏方の仕事を通して新しい学びが得られたようである。

②は、以後の課題に繋がる点である。著者もこの活動に子どもと直に関わるスタッフとして参加して、子どもの複雑な心の変化に気づいてあげられない部分があり、大変な思いをさせてしまった。子どもの望みや悩みを即座に察知することはなかなか大変なことであるが、察知する余裕を持てるように主催者側において事前の綿密な計画を立てる必要があるろう。

③は、野外活動、地域文化活動を通した環境教育をどのように子どもに根づかせるかが課題であるとしている。人に何かを教える・示すとき、基本はまず、自分が楽しむ必要がある。そうでないと、活動のすばらしさを伝えられない。この活動で、楽しむということの意味を理解できたのではないだろうか。ステップアップした自分のこれからの活躍を思い描いていることだろう。

4.5 E 事後の考察。自己や他者、受け入れ先に対しての指摘

①スタッフが今回の旅の流れや趣旨が事前によく把握できていなかったので、来年からは企画の時点からボランティアが参加し、職員と一緒に計画をしていく中で、旅の趣旨や流れを把握する必要がある。
徒歩旅行 言語教育 女子

②しかし、今回様々なケースの障害のある人が参加するというのにそのそれぞれについての情報が私たちに知らされる機会がありませんでした。確かに障害を知ることによって偏見などのいろいろな問題も生じるかもしれませんが、何もデータがないことで、私たちの準備もできないのです。今回の場合でいうと、知的障害のある女の子で、不安になると他人を（自分自身も）殴ったり、髪の毛を引っばったり抜こうとしたりする子がいました。そういうこのところには男子が入るなどの事前対処が可能だった筈です。そういうところを丁寧に詰めていく必要があったのではと考えました。
土と人 言語教育 男子

③家族で参加する事業で、家族のあり方というものが様々なということが分かったし、家庭での教育を垣間見た気がした。以前は子どもだけに目を向けることが多かったが、家庭や地域環境まで気を配って子どもの性格や行動を見ていきたいと思う。子どもの教育は学校だけでなく、家庭・地域のかかわりも重要であると思うので、家庭・地域を意識して子どものことを考えていくのに生きると思う。
氷点下の世界 生活科学教育 女子

④子どもともしっかりと接し、コミュニケーション能力を身に付ける。親や先生方がどのような考えをもっているのか知ること。安全対策や楽しませ方をもっと知る。企画力をつける。

氷点下の世界 生活科学教育 女子

活動後に自分がもっとこうすればよかったと反省したり改善点を模索したりすることは誰しもあることだろう。また受け入れ施設や主催事業のプログラムについても考察する。実際に参加して、もっとこんなことを心がけてくれたらといった意見の中で、幾つかの項目をまとめた。

①と②は重要なことである。①の徒歩旅行は、長期にわたり施設を離れて行われる活動であった。著者の考えとしても、学生スタッフと、職員の方々が共通の認識で深めてい

く部分がもっと多くあったほうが活動しやすかったと考える。特に受け身の部分が多い「教育参加」としては、不安な部分がより多かったのではないだろうか。②においては、事前に情報を与えてもらうことで、もっと有意義に活動することができたのではないかと考えられる。このような対処法についても、相互理解がより重要である。

③においては、活動によって、子どもに対するものから、家庭教育や地域環境における活動の重要性へと視野が広がった。今後の様々な活動が広がりを見せる重要な考察であると思われる。

④は、端的であるが、今後の活動における自己の目標が定まったといえるだろう。いくつもの経験を重ねることにより、自分が何を追究していけばよいかという方向性が定まってくることが多いが、一つの活動から学んだことが大きな成果となっていることがいえる。

4.6 F 障害について

①健常者と障害者の関係がこんなにも難しいとは思いませんでした。思いやりのある子が、障害のある子を手助けしたから、いじめにあうなんていうことがあっていいはずがありません。とても嫌な社会だと思います。今までは、全くこのような問題について考えたこともありませんでしたが、これから自分が生活していく上での問題提起になったと思います。

土と人 言語教育 女子

②こんなに周りから大事にされている彼等彼女等がどこか羨ましく、そう感じた自分はやと彼等彼女等と同じ地平に立つことができた気がしたのです。これからは以前と違う感覚・意味付けで「対等に」接することができるのではと思います。

土と人 言語教育 男子

③私も障害についての知識がほとんどないことに気づき、あせりました。その子どもの障害がどのようなもので、どのようにしてその子を伸ばせるのか、ということを知らずに教師になってしまいたくなくないと思いました。

土と人 芸術教育 女子

子ども理解にも関わってくることもあるが、障害のある子と接するためには、自分の努力や力量だけでは乗り越えられない壁や、理解を深めていくために越えなければならない高いハードルがある。「土と人」は、農業を通して養護学校の子どもたちやその親たちとの交流事業だったので、考えさせられることが通常よりも多かったようである。

①で主張しているように、障害について考えていく生活が必要であることが自分の中に問題提起として生まれたようだ。無知だった自分が関わったことにより、少しでも障害者と健常者の良好な関係について考えていこうという意識が芽生えたのである。

②は少し変わった考え方ではあるものの、偏見を取り除いて、同じ視野で問題に直視することで、対等な感情を持つことができたというものである。気づきは人それぞれであるが、「教育参加」でここまで考えることができるのは、大きな収穫であるといえる。

③は活動の中で保護者と話した末、「現場でも知識を持たない教員がいる」という話を聞いての考えである。著者も、他の活動において障害のある子どもにどう接していけばよいか深く悩んだことがあった。障害のある子どもに対しては、経験と知識のバランスがある意味で本当に必要であるといえる。「教育参加」では、必ずしも即刻知識が必要であるとい

う捉え方ではない。接することで楽しく過ごせるということも重要であるし、必要であるという気づきが生まれることもまた重要なのである。

5. まとめ

本研究では、国立信州高遠少年自然の家における「教育参加」の活動レポートを、次の6つの観点から分析した。(1) 経験することが重要である、(2) 自己・他者を理解する、(3) 「子ども」像の理解、(4) どのように行動するべきか、考えるべきかを知る、(5) 事後の考察。自己や他者、受け入れ先に対しての指摘、(6) 障害について。

これらの分析を通して明らかになったこととして、この「教育参加」の活動に参加することにより、学生たちは、自己の何らかの確かな成長を感じ、教師を目指す学生にとっての実践的な価値ある場として有効に機能していることがあらためて明らかになった。体験的カリキュラムとしての「教育参加」は、教員養成初期段階にある1年次生にとって、教師としての「気づき」の契機になり、教育学部で学ぶための基盤づくりとなっていることであろう。

※なお、本稿の執筆分担は、1～3節を谷塚が、4節を那須が、5節と全体的構成を土井と谷塚が担当した。

<文献>

小林辰至 (2000) 「体験の教育的意義及び体験活動の類型化」. 宮崎大学教育文化学部における教員養成のための教育内容・教育方法改善プロジェクト報告書『「体験的学習」をどのように実践するか』, pp.53-60.

小林輝行・土井進 (1997) 「授業科目『教育参加』の開設について」. 『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』5, pp.143-149.

信州大学教育学部編 (2002) 平成13年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書『第1期「信大YOU 遊広場」の実践－“臨床の知”を求めて－』

中央教育審議会生涯学習分科会 (2002) 『「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」中間報告』(2002.4.18)

濁川明男 (2001) 「全国のフレンドシップ事業の現状と課題－全国教育系大学・学部のフレンドシップ事業に関するアンケート調査結果より－」. 第59回国立大学教育実践研究関連センター協議会事業プロジェクト「教育実践・教師教育部門」資料

文部省 (1997) 『平成9年度「我が国の文教施策－未来を拓く学術研究－」』大蔵省印刷局

谷塚光典・土井進・東原義訓 (2001) 「臨床経験科目『教育参加』における学生の体験内容」. 『信州大学教育学部紀要』104, pp.23-34.

山本恒夫 (2001) 『21世紀生涯学習への招待』協同出版

(2002年3月31日 受付)